

# 乗円寺 寺報

平成30年3月  
春のお彼岸号  
寺報から訊く  
寺報No17

## 乗円寺からの お知らせ

前号にも記載しましたが  
4月中旬頃から玄関、庫裏  
などを改装いたします。  
何かとご不便なこともあると  
思いますが、どうぞ、  
よろしく願います。

## 嬉しいご報告です！

乗円寺を長く支えて下さっている  
お二人が、この度、表彰を受けら  
れました。責任役員の戸田彦市さん  
(76歳)は、長く障害者を支え  
続けたことから、厚生労働大臣表  
賞。門徒総代、東良勝さん(78  
歳)は、多大なる旭日  
地域貢献を受章されおま  
単光章を受章しました。本  
めです。益々のご活躍  
をお祈りいたします。



東良勝さんの旭日章

## ● 親から子へ伝える仏教・真宗

何十年ぶりの大雪がようやく落  
ち着き、今年もまたお彼岸を迎  
えます。以前の寺報のお彼岸号  
には、お彼岸は自分の日常を振  
り返り、仏教の教えに耳を傾け  
る期間と記載しました。普段は  
誰しもが、自分中心の生活を送  
りがちです。心を大きく、共に  
仏教の教えに耳を傾けることが  
出来ればと思います。

毎月、月参りに行かせていただ  
くお宅に、ある高齢のおばあ  
ちゃんがいっぱしゃいいます。い  
つも部屋に入るとお経の本を見  
ていらっしゃいます。そのおば  
あちゃんのお参りする様子や、  
また日々の生活を送る姿勢は、  
いつも私に元気を与えてくれま  
す。「自分が元気で、体に花が  
咲いている時は仕事が忙しかっ  
た。散ってからは体がいうこと  
きかん。」と、自分の体の不自  
由さを笑顔でお話しながら、定  
期的に通っている施設での様子  
をいつも教えてくれます

あるおばあちゃんの温かさ  
ら、それくらいせな」と、職員  
すべての方のお名前を覚える。  
みんなが休んだりしている中、  
タオルを畳むなど、率先して仕  
事をする。また、一緒に利用す  
るお友達が、いろんなことをし  
て遊んでいると「死んだら終わ  
りと言うけど、ちゃんと心は残  
る。だから、ちゃんとお参りせ  
んなん。」と教えてあげる。  
「聞いたるかは知らないけど、  
棺桶に足を入れとるんやから、  
そんな話も聞  
いてかな。」  
そうお話する  
お姿を見てい  
ると、温かい  
気持ちになります。



ある本に、仏教の言葉「智慧」と「慈悲」が、大胆にシンプルに訳してありました。「智慧」は自分の都合を外して、物事を見たり考えたりして、判断・行動すること。「慈悲」の「慈」は、すべての人に分け隔てのない友愛が元になっていて、他者の苦しみに共感しながら、目の前にいる人を、たった一人の子

## あるおばあちゃんの温かさ

悲」として寄り添うことが「慈悲」。そのように書いてありました。その文章を読んだ時になんとなく、そのおばあちゃんと共通する部分を感じました。

何年か前に本山から届いた

揭示物、真宗法語に、

「賢くなることを教える

世の中に、自分の愚かさを

気づかせる教えこそ

人間の道である」

と書いてありました。このおばあちゃんは、このような用語はお分かりになっていないように思います。でも、おばあちゃんの佛様に寄り添い、日々のお参りする姿勢には、長い年月を重ねたからこそ生まれる

「温かさ」

があり、それ

こそが私をい

つも温かくし

てくれるものだと思えます。

(住職)



## 老僧の独り言 ～慈母～

昨年納骨堂を改修して見違えるようになりましたが、この納骨堂を  
置しようと思いついたのは終戦の翌年、昭和二十一年のことです。それ  
までは戦争中に戦死なさった兵隊さんのお骨を五、六体と、一般ご門徒  
の方々の御遺骨を若干お預かりしていましたが、何とかもう少し改ま  
つた場所をと考えておりました。それが今の納骨堂へと形を整えて改修  
されたのです。



最近、自分史を  
作成しています。  
3月1日で  
95歳に！

その頃、こんな想い出があります。数体の兵隊さんの御遺骨の中に、  
「故陸軍伍長 村瀬治郎之霊」と記された白木の骨箱がありました。  
(このご自宅は当時、市内諸江町にあったのですが、現在は神奈川県へ  
転居しておられます) 南方の小島で玉砕された、その治郎さんの遺骨で  
す。家族構成は、戦死なさった治郎さんの母親「ひろさん」と、就学前  
に遺児となった治郎さんの息子健一くんの二人だけでした。ひろさんの  
夫は、既に故人であり、治郎さんの奥さんは戦後、間もなく他家へ嫁が  
れていて、祖母と孫の二人だけの静かな家庭でした。

毎年お盆になると、ひろさんは健一君と連れ立ってお参りに来られま  
した。お経が済んで私が自室に引き上げるのを待っていたかのように、  
ひろさんはお骨の安置してある本堂内陣余間へ遠慮がちに、そつと上  
がられるのです。そして、膝で躄るようになり、お骨の前へ行き両手を伸  
ばして骨箱を取り、しっかりと胸に抱きしめて「ご哀れなれます」

「治郎、お母ちゃんや……分るか……お母ちゃん  
や治郎分かるか……聞こえるか治郎……つらかったや  
ろな……痛かったらうな……食べるのはあつたん  
か……」

嗚咽をもらしながら、戦死した一人息子の骨箱を抱く母の姿があつたの  
です。尊い姿です。なに人の容喙も許さぬ慈母の姿が、そこにあるので  
す。同じようなことが毎年のように繰り返されていたのですが、そのひ  
ろさんも、ついにお浄土へ還られました。ひろさんがおっしゃった、  
「聞こえるか……聞いとるか……」これは常に佛様が  
私共「凡夫」と称される、すべての人間に向かって呼びかけ続けて下さ  
るお言葉なのです。

お経には「諦聴諦聴(あきららかに聴け、あきらかに聴け)」と示され  
ています。仏教が「自己を問う自覚の論理」であると教えられるのは、  
正にこれなのです。あきらかに聴かねばならぬ、この自分の所在こそ問  
われるのです。私たちは四六時中、この呼びかけの中で生かされている  
のです。

祖母と孫、親と子の間に絶えず醸し出される温かい慈愛の心、これが  
佛の慈悲なのです。この廣大無辺の慈悲の温光を浴びさせてもらって、  
「聞いとるか、聞こえるか」と呼びかけ給う、如来の本願の真つ只中で  
生かされているのが、人間なのです。 合掌